



羅針盤

菅谷 誠
Makoto Sugaya

国際医療福祉大学医学部皮膚科学 主任教授



「むくみ」について考える

浮腫の特集号をまとめるように、恩師の大槻マミ太郎先生からお話をいただきました。私の専門は「リンパ浮腫」ではなく「リンパ腫」なのですが？と一瞬とまどいましたが、私が皮膚科に入局したときの病棟医長、皮膚科医としての基礎をみっちり叩き込んでいただき、美味しいお店にもたくさん連れて行ってくださいました。まさか断るわけにはいきません。留学中に研究したマウスがリンパ浮腫をおこすことから、帰国後もリンパ浮腫に関する動物実験を細々とやってきました。このマウスの研究のご縁で、リンパ学会のシンポジウムに演者として呼んでいただいたり、今回ご執筆いただいた山本匠先生の卒業論文の審査員になったりしました。

また、日本リンパ浮腫治療学会副理事長の重松邦広先生にも玉稿をいただきましたが、先生も東京大学のご卒業で、さらに現在も同じ大学に勤務しているというご縁があります。そのほか多くの知己の先生方に執筆をお願いし、幸いなことにご快諾いただきました。浮腫という題材で原稿を集めることは大変なのではないか、と当初考えておりましたが、私のこれまでの「きずな」で、何とか特集号を作成することができました。2021年日本皮膚科学会総会の「語ら猿(語らざる)会頭講演」で人々に感動を与えた大槻先生に、これまで関わった人々への

感謝の気持ちを思い出す機会を与えていただいたような気がします。大槻先生ならびにご執筆いただいた先生方に、誌面をお借りして改めて感謝申し上げます。

「むくみ(=浮腫)」は一般にもよく使われる言葉ですが、実はこれほど皮膚科医を悩ますものはありません。多くの鑑別疾患をあげないといけない割に原因がはっきりしないことも多く、さらに有効な治療も限られているからです。高齢者の下腿のむくみに遭遇することは日常茶飯事でしょう。終末期の患者では全身がむくんでしまい、点滴を入れる血管がみつからなくなります。そのような状態になると積極的な治療も難しいですし、ご臨終が近いことを悟る徴候でもあります。やみくもにフロセミドやアルブミン製剤を投与しても焼け石に水ですし、血管内脱水を改善しようと輸液を増やすと、かえって浮腫を悪化させてしまいます。

何だか苦手意識をもちやすい(私だけ?)「むくみ」ですが、本特集号は多くの執筆者のご協力のおかげで、さまざまな原因による浮腫の症例、外科的あるいは保存的治療法、ケアにおいて大事なことなど、多くの内容を盛り込むことができました。本号をお読みになった先生方が、少しでも「むくみ」に興味をもっていただければ幸いです。